

平成三十年一月一日発行 第二十八卷第一号 通巻第三一九号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐 かい

平成30年1月号

岡井省二創刊



# 抑止力

高橋将夫

黄色なら黄色に匂ふ林檎かな  
用件を忘れて帰る月の客  
案山子言ふ抑止力とは我のこと  
渦を巻くなり銀漢も情熱も

霞網に我が妄想がからまりぬ

普段着のまま山から小鳥来る

新酒酌みはては煙となる身かな

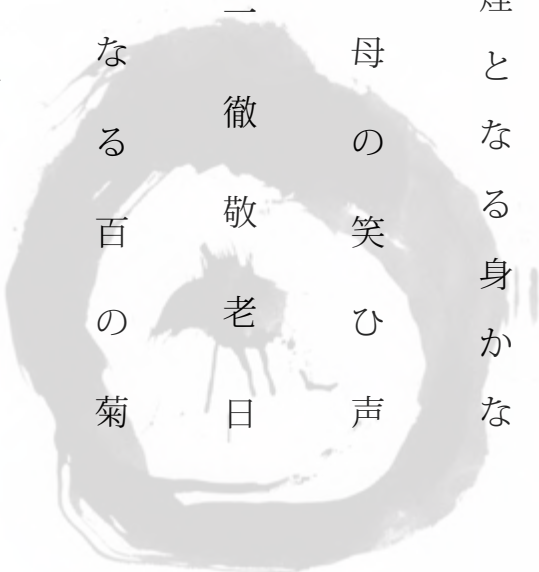
朝寒も夜寒も母の笑ひ声

金太郎飴は一徹敬老日

一体の人形となる百の菊

賑やかに祇園精舎の虫の声

糖二十六年大会一旬



# 槐安集

水野恒彦

遊戯の果てころげ落ちたる露万朶  
晩秋の人語は遠くなるばかり  
草の息星の雫も秋思かな  
海嶺を幽に照らす今日の月  
暗がり峠は銀河流るる音きこゆ

加藤みき

エネルギーは吾のためにあり初暦  
秋風やアイロンがけを存分に  
立冬の一人遊びの家鴨かな  
部屋の奥に日の来てゐたり石路の花  
若水や天にたまはる水道水

中島陽華

新走りさては品川女郎衆かな  
ときをりの夜叉の破顔を富有柿  
秋の蚊に齒のなき貌を訪はれをる  
これやこの女泣かせの新蓮根  
今生の母の唸りを星月夜

竹内悦子

西側に日のあたりたる金木犀  
曼珠沙華踊る阿呆となりにけり  
三輪車乗りすててある刈田かな  
木屋や麻<sup>を</sup>箆<sup>け</sup>職人の足の胼<sup>ひ</sup>胝  
青柿や二股の木をよろこべり



雨村敏子

吾亦紅野にあるときの吾亦紅  
花野駅にたどり着きたる月日かな  
町石や女人高野の紅葉濃し  
月夜茸紅天狗茸西鶴忌  
月光や愛の讃歌と金剛杵

近藤喜子

静かなる音よ光よ杵散る  
熟柿落つ解怠の深くなる真昼  
鳥くるや遠くゆく夢もつ榎の実  
龍淵に潜む岩肌くらくして  
蔓あまた焚き晩秋を送り出す

本多俊子

ひれふせて大根を蒔くたなごころ  
枯尾花魑<sup>すだま</sup>魅<sup>ま</sup>の風の吹きおろす  
うたかたの消えて水面は月のもの  
仮の世はつまづくばかり秋の草  
天の川解け合ふ心持ちにけり

瀬川公馨

白頭の穂芒みんな布袋かな  
松手入れ間道ぬけるとりけもの  
厄日あと木木の肌の透けにけり  
長雨に椋鳥の瞬く樹上かな  
冬の蠅もてきし筈やピブラフォン

久保東海司

回廊の軋み足裏の紅葉冷え  
拳をはなれ豆腐ゆらりと神渡し  
風涉り霧は外人墓地を攻める  
枯るる中鴉の濡れ羽色ひかる  
飛行機より昼の花火の見たはず

柳川 晋

仏とは釣瓶落しを拾ふもの  
牛蒡掘が地球の芯に触るるなり  
飄飄としたる生首榎檀の実  
阿字観の阿に魅入られし穴惑  
月光の塵を払うてをりにけり

熊川暁子

秋扇昼のほてりを折りたたむ  
伎芸天が筆持ちあるく紅葉山  
何の実ぞ秋思に形あるごとし  
行く雲にたやすく乗りて鮎下る  
風あらし日がそもそもの枯れ始め

寺田すず江

紫のつゆに濡れをり式部の実  
鷹渡る点となりゆく虚空かな  
乗り継げばスマホの世界うそ寒し  
秋夕焼ほむらの中へ身を投ず  
ユーホーを見たとき昂る貝割菜

岩下芳子

鯖雲の腹のあたりにクレーン伸ぶ  
秋の蠅大砲の口覗きぬる  
拾得となりて落葉を掃きにけり  
赤瓦の家並光りし初時雨  
冬薔薇男結びの荷の届く

近藤紀子

秋水に木簡静かに浸さるる  
手のとどく枝になかりし喪の實  
麴ほぐす手もとに秋の蚊の来たる  
正せども傾きたがる案山子かな  
窓ごとの秋燈見るや人戀し

岩月優美子

平家琵琶ぼろんと秋を深めけり  
蒼天の音なき鄙に秋の声  
騙し絵の中に真実秋没日  
冷まじやヨハネの首を持つサロメ  
幻影か彼方に光る月夜苜

竹中一花

銀鯉や秋色浅き谿の道  
目鼻なき千代紙人形日向ぼこ  
山霧や祝詞の奥に五狐の神  
法然の松に親しき枯蓮  
猪鍋や山里夜を深うする

前田美恵子

さてもさてお菊の井戸や小鳥来る  
色変へぬ松の縄張り埋門  
敗荷未だ魂の抜けきらず  
良縁も悪縁もあり着ぶくれて  
爽やかや旅客機銀の点となる

中田禎子

終章は美しくあれ秋の薔薇  
色鳥の枯山水を渡り来る  
夜叉のこゑ土の奥より紅葉山  
月歌に人の入りゆくけもの道  
手折りたる芒血潮の滲みかな





# 槐市集

杉原ツタ子

秋灯の続く対岸海昏し  
地方紙と夫の摘みたる吾亦紅  
油点草壺中に静を宿しをり  
月の暈抜け行く雲とジエツト音  
月下にて朱き櫂をたたきをり

高野昌代

鬼やんま捕つて咬まれてあのねのね  
十月や九条まもれの総選挙  
長き夜や使ひ切れずの青春切符  
子午線友の待つ姫路へを西へ西へと鳥渡る  
光陰に誘はれ靡く秋七草

竹村 淳

せみ塚山形県五等や尾花沢遙か秋清涼  
蝸や限界集落見舞ひけり  
法師蟬一人旅だと友訃報  
彼岸花両手に摘みて棄てし昔  
敬老日畑におわれて畑におり

田中信行

野分去り校庭に降る日差しかな  
彩雲や外人墓地の秋深し  
さわやかや詩人氣取りて歩きたる  
秋麗やそぞる歩きの似合ふ街  
水面の葉色なき風に揺れてをり



田中美恵子

提灯の木瓜紋や秋祭  
風化せり墓石の文字や櫨紅葉  
どぎやう掬ひ笑ひ転げる秋の夜  
ジャズ喫茶出で満天の星月夜  
おけら鳴く零れさうなる星の数

時澤 藍

おせつかいやかれ煩きぬのこづち  
猪に領地奪はる人間界  
秋茜ぐるりぐるりとハイタツチ  
枝折戸に斧預けたる枯蠅螂  
今はもうやつかいものの山の柿

中 貞子

秋高し御恩奉謝の経唱ふ  
箒木の燃ゆや悪事のなき家に  
花薄運動場は昼休み  
新小豆の目のにこにこと笑ひける  
踊りの輪に出雲の阿国加はりぬ

中島昌子

鳶職のひよいひよい登る秋の天  
菊花展かつてやんちやの子の名前  
お手玉のほどよき重さ小鳥来る  
里芋の土の香剥いてをりにけり  
すり減りし金剛杖や夕紅葉

中谷富子

予報士のユーモア好きや柿すだれ  
気のおけぬ友と出掛けし祭笛  
露の世を駈け込み寺に入る男  
蝉よりもはげしく泣ける稚生まる  
デートさえ忘れ鬼灯鳴らし合い

中堀倫子

バス降りて歩きながらの月見かな  
露草やペロリと舌を出してをり  
みひらいて何を山猫賢治の忌  
神の花の能書きを読む九月尽  
空の鳥そそのかされて秋の声

# 槐集

## 高橋将夫選

嘘と真見て見ぬふりや台風の目 大阪 藤田美耶子

愚痴一語のみ込み笑顔爽やかに  
神々も魔女にたじろぐハロウイン  
ジーンズの案山子見張れる学習田  
潜みゐるものの気配や乱れ菊  
秋光を巻きとつてゆく糸車

有松 洋子

蓑虫の蓑に流行はやりのあるらしき  
おほらかな山に毒茸安住す  
この話題逸らさむ外は秋の晴  
月明やうづくまる影脱ぎ捨てむ  
はたはたの上にはたはただ狂へ  
曼珠沙華秘密抱へて真つ赤なり  
思春期や青無花果の丸かじり  
秋祭お天道様のおかげです  
足裏にも心のありし秋の雨

江島 照美

ジパングに生くる実感黄落期 守口 三木 享

秋の蝶影より軽き身を余し  
偶然是風のいたづら木の実落つ  
彼いはく嘘も方便けむり茸  
夜長し時計互ひに節曲げず  
長き夜のつまぐる念珠の軽さかな  
鳴き合ひて俱会一処の渡り鳥  
大阪 平野 多聞

月の夜ののなき舟の航路かな  
枯蠓螂の不退転なる構へかな  
多聞京都東寺にて天を担ぐ地天女秋の顔  
今生の空の明るし金木犀 岡崎 犬塚李里子  
重陽や闇に一縷のひかりあれ  
花よりも葉に来る疲れ菊人形  
夕月の仄かに白し魂送り  
流星や決断促すかのやうに

# 銀河往来 ◆槐集観照

高橋将夫

嘘と真見て見ぬふりや台風の目 藤田美耶子  
周りの暴風雨に対して台風の目は静か。まさか自らが起こした災害を知らないはずはなかるうに。

〈愚痴一語飲み込み笑顔爽やかに〉は作者の爽やかな気持が伝わってくる一句。〈潜みぬるものの気配や乱れ菊〉の句は「乱れ菊」の本質に迫る。

〈神々も魔女にたじろぐハロウイン〉の句と〈ジーンズの案山子見張れる学習田〉の句はユーモアがあつて楽しい。とりわけ、学習田のジーンズの案山子は雀だけでなく、生徒達も見張っているという着眼は非凡。

秋光を巻きとつてゆく糸車 有松 洋子  
「糸車が秋光を巻きとる」という描写が素晴らしい。言葉遊びではなく、感性の問題なのだ。

〈蓑虫の蓑に流行のあるらしき〉と〈おぼらかな山に毒茸安住す〉、どちらも常識から脱皮している。

〈この話題逸らさむ外は秋の晴〉は「秋の晴」への展開がよい。

思春期や青無花果の丸かじり 江島 照美  
初恋の極端に対して、思春期は「青無花果の丸かじり」だという。作者の思うところ、想像するに難くない。

〈はたはたの上にはたはたただ狂へ〉と〈曼珠沙華秘密抱へて真つ赤なり〉からは、作者の気持の高揚が伝わってくる。

〈秋祭お天道さまのおかげです〉は素直で、好感が持てる。

ジパングに生くる実感黄落期 三木 亨  
マルコポーロの東方見聞録の黄金の国ジパング。黄落期、日本は黄金の国となるのだ。

〈秋の蝶影より軽き身を余し〉の「秋の蝶影より軽き」は素晴らしい表現。実は、夏蝶のように華やかに舞いたいのだろう。〈偶然是風のいたづら木の実落つ〉、偶然と思つていたら実は原因があった。そんなことが、他にもいろいろありそう。

〈彼いはく嘘も方便けむり茸〉の「嘘も方便」は男の身勝手な言い分。そんなことで煙に巻かれるほど女性は甘くない。

長き夜のつまぐる念珠の軽さかな 平野 多聞  
何を思つて念珠を指で手繰っているのか知らないが、その軽さは秋の夜長をかるやかにしている。

流星や決断促すかのやうに 犬塚李里子  
流星に対するユニークな見方だと思ふ。

〈今生の空の明るし金木犀と〉花よりも葉に来る疲れ菊人形〉の句、いずれも作者ならではの精神の風景。

みだれ萩囲はれてより色深む 阪倉 孝子  
みだれ萩の本質に迫っている。

〈花野行く失ひしもの光りをり〉と〈晩節の自由席なり大花野〉の句、いずれも素晴らしい精神の風景。

〈金色の隈取りにらむ秋の鱗〉の句は俳諧。

遠き世を見んと皇帝ダリアかな 吉田 順子  
背の高い皇帝ダリア。そうか、遠い世を見ていたのか。